

バーサーカーになつたら会話が出来なくなつたんだがw

きらきら

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何やかんやで転生したオリ主が、失った未来を取り戻す為に奮闘する物語

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

(特別意識 : ガチャ回させろよ wwwwww)

目 次

DQN死すべし慈悲はない	1
話聞かない系女神つてマジ女神	1
俺たちの物語はこれからだ！↑なおボツチ	1
邂逅	1
頭のおかしいパーティー+バーサーカー	1
冒険者登録	1

31 21 12 8 4 1

# DQN死すべし慈悲はない

イヤツフオオつおおおお!!ついにこの時が来ちゃいましたよww  
ぐだぐだイベ礼装狙いで呼符回してたらヘラ来るとかwwつい  
に宝具レベル5になつたぞいwwいやマジで長い道のりだつたわ  
ww

画面に映し出される宝具レベルアップと効果音と共にその下にあるLevel5という表記を食い入るように見る。

いやまさかここで来ちゃいますかww H.F公開記念で宝具レベル2から4まで上げれたがそつから地獄になつたなw まさか2ヶ月分の給与の使うとかw それでも出ないガチャはマジで糞すぎる  
w 何でだよ? 黒王はとつくに宝具レベルマになつてひたすらアプリになつていくのにどうしてヘラが出ねえんだよ? おいピックアップさんマジで仕事しろ(恫喝)。クラス別とかは地雷臭がしそぎたから安定のスルーをして次回のピックアップ待ちの姿勢に入つてたんだがw

駅のホームで楽しい楽しい社畜ライフへと誘う電車を待ちながらイベ礼装が出たらしいなあと思いながら单発を回す。金色の光。「ん?」クラスはバーサーカー。「んんん?」ヘラクレス召喚。「ヨツシャアアアアッ!!」↑今ここ。

突然騒ぎ始めた自分を周りの人は迷惑そうに見てくる。髪を金髪に染めたイキリキッズが睨んでくる。おおつと興奮しすぎたようでおじやる。取り敢えず頭をサーセンwと胸の中で言いながら下げる。そんな些事よりもバーサーカーである。聖杯入れてレベルは100で当然スキルマ。星4フォウもイベの時と毎月のレアアプリ交換でコツコツ手に入れてカンストして、今日ついに宝具レベル5になつた。残りは絆レベル上げで現在12であり15まで目指すだけである(最終試練)。

フハハハハツ!うちのバーサーカー<sup>ラクレ</sup>スは最強なんだ!(雁夜おじさん感)

やっぱヘラクレスつてカツコ良すぎますわ w SNでも全裸王 ゴージャスな変態

相手にイリヤをずっと守りながら戦うとかマジでパネエつす。しかも己が神話を乗り越えるとかガチで鳥肌立ちました。何も出来なかつた正義くんは黙つて下さいねー w

劇場版HF2章でもセイバー戦マジでヤバかつたつす。もうなんつーかド派手でした。語彙力なくてサーセン w つか腹ペコ王強くね? 青から黒にイメチエンしただけで何であんなに強いの? あつ、ハンバーガーのせいか: (悟り) 【悲報】正義マンくん、黒聖杯にマイ鯖を寝取られたw

1章の怪人青タイツとハサン先生より演出は派手だつたと思います(当社比比べ) なお1章では毎回の如くする正義の味方とランサーの戦闘はカツトされた模様。是非もないヨネ! 良かつたね正義くん! 死ぬとこダイジエストされてたよ w

共通ルートで毎回やつてるしオマエ等も飽きてるよな w w

そんな事より何でもかんでも責任押し付けられるガス会社さんはそろそろ聖堂教会と魔術協会を訴えてもいいと思います。これマジで。

警笛が鳴る。

おつ。そろそろ電車来るか。この通り過ぎていく次の電車がお迎えだな。

アーラシユパイ先あざしたw 後はスバルタクスとフレ頼光が何とかします。アーラシユパイ先がいつも通り爆散してキラキラになると、

ドンッ。

「サーセン w」

と肩をぶつけてきたニヤケ面のキツズAがこちらをヘラヘラしながら笑つてくる。後ろのキツズB & Cもニヤニヤしている。殴りたいこの笑顔(ニツコリ)

そんな事より衝撃でスマホが手からすっぽ抜ける。  
ノオオオオオツ!スマホケースをコ○バースのにしたら滑り止めなくてツルツルで滑りやすいんだよ!

線路に落ちるスマホ。咄嗟にルパンダイブする。スマホは…ギャアアアア！画面割れてるううう！？あ、でも操作出来るなこれ。スバルタクスに宝具撃つてもらつてど。

「おい！さっさと上がれ！」

るつせえな。俺の周回の邪魔すんじゃねえつーの。頬光さん出番です。サクツと殺つちやて下さい。

「もう電車が!?」

るつせえな。ガタガタガタガタ…ってこれ電車の音か。ん？左には電車が…ってアレ？何か車掌さんめっちゃ慌ててね？つか俺ちゃん線路の上にいんじやん。

電車と○○の距離13m

つーか周りがゆつくりしてると中で何でこんな普通の速度で俺ちゃん考えれてんの？え、走馬灯つてやつ？

電車と○○の距離9m

まさかの俺ちゃん終了のお知らせww

オワタwww＼( ՞ ՞ )／

つてふざけんなし！こちとら水着沖田さんの実装待ってるんだよ！今年されるつて噂されてるんだよ！つかぐだぐだイベの続き気になるんだけど！本当にファイナルなの！？

電車と○○の距離4m

つてもう無理か…。なら最後に…

DQN死ねつ！！くたばれつ!!fuck yoo…

電車と○○の距離0m

グシャツッ!!

中指を立てた右腕が宙を舞つた

# 話聞かない系女神つてマジ女神

ハツ。此処は一体？気が付けば周りが暗く何処までも広がつているところにポツンと椅子に座つていた。

あ…ありのまま今起こつた事を話すぜ！「俺ちゃんは電車に轢かれたと思つたらいつのまにか妙な場所にいた」な…何を言つてゐるかわからねーと思うがおれも何をされたのかわからなかつた：頭がどうにかなりそうだつた：催眠術だと超スピードだとそんなチヤチなもんじやあ断じてねえ もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ：

「○○さん。ようこそ死後の世界へ。」

後ろから声が聞こえて来る。かつかつと足音が響く。

「あなたはつい先程不幸にも亡くなりました。」

そして自分の前の椅子に如何にもTHE女神と言つた美貌の女性が座る。

「短い人生でしたが、あなたは死んだのです。」

そんな事より自分のiPhone知りません？

「…。私の名前は△△。日本において若くして死んだ人間を導く女神です。」

ねえねえ話聞いてる？どつかのRPGの人の話を聞かずに勝手に話を進めてくキャラじゃないんだからさ、人の質問にはちゃんと答えようよ？

「…あなたのiPhoneはあなたの足下にあるじゃないですか  
eだつたものがあつた。  
？」

え？言われた通りに見てみるとそこには粉々になつたiPhone  
嘘だつ！（レナ感）

「いや最初から目に入つてましたよね？さつきガン見してましたよ  
ね？どんだけ認めたくなかったんですか？」

呆れてこちらを見る女神△△。もうやめて！○○のライフはもう

0 よ！

ああ、アアアアアアアアアツ!! ふざけるな！ ふざけるな！ バカ野郎！  
ウオー！（切嗣感）

データが！ くつそ今までどんだけ課金してきたと思つてんだよ!? それに金だけじやない！ アンリマユ宝具5にすんのにどんだけフレポ回したんだと思つてんだよ！

（うわあ。 ガチ泣きしていますね…。 少し記憶を覗いて見ましょうか。）

（ええ…。 これはひどい…。 とんでもない重課金厨じやないです。 給料から必要最低限の生活費を抜いた後は半分は実家に送つて、 残りの半分は課金つて…。 仕事中もA Pが余りそうになつたらするとか…。 それに毎朝感謝の100連ガチャつて何ですか意味がわからせんしわかりたくもありません。 て言うかグー○ルに勤めてたんですか！ 驚きです。 でも少し可哀想になつてきましたね…。）

20分後、

「よしよし、 大丈夫ですよ。 ほら此処にはあなたを傷つけるものは いませんよ。」

やだ……いやだよう……こんなのはひどい……あんまりだ……うう ……かえして……かえしてよ……グスつ。

（まさか大人の頭を撫でる日が来ようとは…。 神生じんせいわからないものですね。 …まあ嫌いじやないんですけど。 うーん。 どうすれば元気になつてくれるでしょうか？ そうだつ！ この提案は喜んでくれるのでしようか!?）

この女神、 先任アクリアから引き継いだばかりの経験の浅い若手女神であり、 周囲からは有能だと期待されており実際にそうなのだが… 実は相手がダメ男であればあるほど尽くしてしまうという悪癖がある。 そして○○が初めて導く人ということもあつて…

「落ち着きましたか？」

何だか頭がぼんやりして記憶が曖昧で…。 i Phone、 電車、 DQN… うつ、 頭が！ まあこの女神様（一応）は何処か信頼できそうっぽい。 何故かわかる。（ 。 D。 ） ハツ！ これがもしかして運命の出

会い…? な訳ねえか w

「うほんつ。あなたには3つの選択肢があります。このまま全て忘れてゼロから新たな人生を歩むか、それとも天国的なところでおじいちゃんみたいな暮らしをするか、最後は異世界に記憶などはそのままに転生特典をもらつて転生をするかです。」

異世界? いきなりなろうつぽくなつたな w やべえスマホ太郎さんかよ w w つてスマホ使つてなかつただろ太郎さんよ w まだ格安スマホのほうがスマホ使つてたわ w ん? スマホ? 何かこのワードに引っかかる。大事な事を忘れている気がする。そして謎のまるで思い出すなと言いたげな頭痛が…。そう言えば…。脳裏に粉々になつた iPhone がフラツシユバツクした。

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ —————↑声にならない悲鳴 (+狂化 E X)

「私的には異世界に転生をお願いしたいのですがいかがでしようか? フフツ。そんなに頭をブンブン振つてよほど異世界に転生したいんですね。クスッ。」↑違うそうじやない

「それで転生特典ですが、普通はあなたに特典リストから選んで貰うのですが…。あなたは私の初めての人ですし、ここは私からの特別なプレゼントです。本当はダメなんですけど内緒ですよ?」↑誰も頼んでいない

「聞いて驚いてください! あなたの転生特典はあなたの記憶のヘラクレスの肉体です! どうですか? 嬉しいですか?」

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ —————↑やつと声が出るまで回復した。なお人語は理解していない模様。

「フフツ。そんなに喜んでもらつて私も嬉しいです。あ、でも流石に十二の試練ゴットハンドはマズイのでありませんよ? まあ代替生命がないだけで一度受けたダメージの耐性獲得はありますからね。安心してくださいね。」↑既にオーバースペックすぎる。

「それじゃ魔法陣から出ないようにしてくださいね。」

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ —————↑未だ錯乱状態

「元気な返事ですね。フフッ。」→誰かこいつ止めてくれ

「○○さんの希望は規定により受託されました（されていません  
ゴリ押しで：おおつと誰かが来たようだ）」

えつ何か気が付いたら身体宙に浮いていつてるんですけど？まさ  
か無重力体験ができるとはw↑ようやく正氣に戻った

「さあ勇者よ！願わくば数多の勇者候補たちの中からあなたが魔王  
を打ち倒すことを祈っています！さすれば神々からの贈り物として、  
何でも願いでも叶えて差し上げましよう！」

何でも!?今何でもって言つたの!?え！マジで！FGOの引き継ぎ  
ナンバースマホん中に入れてたから絶望だつたのに戻つてくんの!?  
つか今どゆ状況ww取り敢えず魔王つてのぶつ殺せばいいのw?  
一般ピーポに何求めてんだよw

⋮ヒュー！無重力で回転キメンのたーのしーw

→現実逃避

やっぱ何か気持ち悪くなつてきたんだけど…。

「さあ旅立ちなさい！」

やべえマジで吐いていいすかw無重力気持ち悪！

白い光に包まれて何も見えなくなつた。

俺たちの物語はこれからだ！→なおボツチ

え? こ<sub>二</sub>何処?

見渡す限り青空が広がる草原にいた俺ちゃん。妙に高い視点になつてゐるが、そんな事は気にせず取り敢えずは…

地面に向こうを歩いて泳ぎはどこかを出る  
やつベマジで無重力無理w あんなに気持

なんすけど w  
ふーwスツッキリしたー w まさか浮遊系アトラクション駄目だつ

たとは驚きW つか自分の手見て気付いたこと

てか身体自体もでつけえしめつさ筋肉盛つてんじやんW  
やつば、

胸筋やつば W 頭おかしすぎて草しか生えねえ W

ゆり言ふて云々?

— 1 —

→こんな風にしか実際に言語化出来ねえのだがW

二三二障おつわ

んつ!? だつて足下に見覚えのある斧剣刺さつてるし!

無理無理 w 型月世界に転生憑依とか生存不可避 w え? ゴールド P に確定でぶつ殺されるの? 嫌すぎる w でもイリヤと過ごせ マイエンジエル

れるのか…。アリです！

おや？ 空からこちらに向かってヒテヒテと手紙が落ちてくる。自分と文通したいとかどんな奇特なガールかしらん？ → 野郎という線は微塵も考えていない

「」の手紙を読んでいるということは無事に転生できたみたいです  
ね。特典のヘラクレスの肉体は馴染んでいるでしょうか? だとした

ら幸いです。それと最後にもう一つだけ贈り物をしますね。あなたのお役に立つと思いますよ。魔王を是非、あなたの手で打ち倒してください。byあなたの女神より。」

読み終わつたあと手紙はキラキラと粒子状になつて消えた。：ま

あんな事よりだ、  
お 前 の セ い か w ーーー！

死亡フラグとチート能力がゴロゴロ転がつて型月世界地雷原じやねえことは救いだが：イリヤに会えねえのかw やつぱ残念だわww まあプラスに考えよう。あのヘラクレスになれた事はまあ嬉しいけど、嬉しいけどっ！（強調） ぐだぐだイベ続きやりてえw FGO出来ねえの辛えww それにこんな世界じやHF3章見れねえじやん！やっぱ魔王つての倒さなきやなんねえのかw 他にも異世界転生キッズいるらしいし急がなきやなw まあヘラなら大丈夫つしよ

（慢心）

てか考えたらヘラの身体で俺ちやんゲロ吐いてたんだよな？

申し訳なさ過ぎて死にてえwwwwwwwwwwwwww

よし落ち着いた。うん落ち着いた。Be cool！

そんでお役立ちアイテムつて何だよ？全然見当たらねえじやん？カンペしかねえじやん？

え？これっ!?お役立ちアイテムつてカンペかよ？ 草ww 取り

ええず拾つてみるかw

拾つてみると、頭の中に情報が流れ込んできた。

アンリミテッド・ペーパー・ワークス  
無限の厚紙

- ランク : E
- 種別 : 対話宝具
- レンジ : 1
- 最大捕捉 : 1~10人
- しか話せない？相手に何を言つているか理解してもらえない？もう会話にチャレンジするのをやめたい？ そんな悩み、あ

りませんか？

そんな人にはこれ！そこのただのカンペじゃんと思つた人！違うんですよー。このカンペは何と！いくらめくつても尽きないんです！まさに無限！

しかもそれだけじゃないんです！このカンペは特殊な纖維で出来ており、付属のペンじゃないと汚れないんです！し、か、も！安心の不壊加工がされており、どれだけ雑に扱つても決して壊れません！馬鹿力で何でも壊しちゃう： そんなお悩みを持つ人でも安心して扱える設計になつております。

気になつちやつてきましたね？お次はペンの説明に移りましょう。この付属のペンは、お客様の魔力からインクを生成する機構で決して尽きることはありません。魔力も微小な量で増幅して増やしていくため、魔力量に自信のない御方も安心して使用できます。

文字を書くのが苦手…そんな人でも大丈夫！このペンには全自动筆記アシスト機能が搭載されており、書きたいと思つた内容が脳の電気信号を読み取る事により、ペンを握るだけで手が動きます。

そしてこのペンの一番の特徴はなんと！無くした際に戻つてこいと念じるだけでそこから文字通り飛んできます！まさにアク○オ！ですね！

物をしょっちゅう無くしてしまう： ペンをついつい飛び道具として投げてしまう： そんな人もその悩みとは永久におさらば！定期的なペンですね！

本商品は普段は霊体化しており、ユーザー登録をすることで、使い時に何時でも何処でも取り出して使える仕様となつております！どうぞこのカンペとペンを使って素敵なお筆談ライフを楽しんでくださいね！

p. s この商品の運送は安心安全迅速にがモットーの総合運送会社、アマゾネス・ドットコムが担当しています。アキレウス○ね！

え？ 無駄に高性能すぎじゃね？（驚愕）



## 邂逅

「カズマ！今日こそはあの憎つきカエル共をぎつたんぎつたんに  
するわよ！」

「いやお前前回ヌルヌルにされてんのにどつからそんな自信湧いて  
んの？馬鹿なの？さすが駄女神、学習しない。」

「むつきー！女神に対し何よその言い草は！ゴットブローフ食らわ  
せるわよ！」

「カズマ！カズマ！早く行きましょう！私の爆裂魔法を撃ちたいと  
いう欲求が抑えられません！もうここで撃つていいですか!?」

「だあーー！お前は耳元で騒ぐなうるさい！倒れるならせめてカエル  
の何匹か吹つ飛ばしてから倒れろよ！今ここで撃つても絶対背負わ  
ねえからな！」

「おいカズマ、先程言つた通りにもし私がカエル共に嬲られていよ  
うとも助けなくていいからな？アクアとめぐみんのフォローに徹し  
ていればいいからな？私は皆を守るクルセイダーだから身を挺して  
かばつてそして…ああんつ！」

「黙れドMクルセイダー。」

「はあんつ！」

(チツ、何でクエストに行く前からこんなに疲れなきやいけないん  
だよ…)

今回のターゲットであるジャイアントトードがいる平原を目指し  
て森の中を進んで行く一行。

「あれ？」

「どうしためぐみん？急に立ち止まつて？トイレか？ならさつさと  
そこの茂みでもして来いよ。」

「紅魔族はトイレ何てしませんつて前言つたでしようが！？てかうら  
若き乙女に向かつて茂みでトイレしろつてあなた鬼ですか！？」

先頭を歩いていためぐみんが止まつた為に全員が足を止める。

「はいはい。紅魔族はトイレ何てしませんでしたね。トイレじゃな

いんだつたらどうしたんだよ？」

「その…先の方で何か獣が吠えているような声が聞こえませんか？」

それに今地面揺れませんでした？」

「ああ？」

耳をそばだてる一行

「……確かに聞こえるな。でもこんな吠え声のモンスターなんて近くにいる覚えは無いのだが…？」もしや新種のモンスターか！…………よしカズマ行こうつ！」

「いやお前何輝かしながら言ってんだよ！どうせ絶対嘘でもねえ事考えてんだろ！」

「なつ！ 新種のモンスターによる未知の攻撃なんてき、期待にハズ！」ぶ、海尋するのもハハ加減こしろ！」

「思いつきり期待してんじゃねえか!?この真正マゾが!」

なく吹っ飛ばしてやりましょう！」

二発で仕留められなかつたので、

告すればいいんだつて！

「取り敢えずさつさと行くわよ！カズマ！」

「引つ張るなってアクア!? ちよつ、力強つ!? お前ら、人の話聞  
けーーーっ！」

けーーーつ！



あのとき引き返していればこんな事にならなかつたのかもしけない。

目の前で自分の顔を睨みこける赤と金の双眸を見こめたから俺は  
そう思つた。

そして、豪腕が振るわれた。

}{}

ユーザー登録とかしたし次はいよいよへラクレスの身体能力試してみるでwww

屈んでからせつーの！

足の筋肉が屈むと同時に急速に縮まり、地面が圧力によりひび割れる。そして一気にその暴力は開放された。

は？たつけなーおい。（ガチトーン）

?

その日、○○は思い出した。

高所の恐怖を、高低差0の地面に足を着けていた安らぎを、

にして頂點まで達して一瞬の間、どうやら重力が這肩の二方から基づいて自由落下を始めた。

— — — !

ギヤアアアアアアアアアアツ！ 恐<sup>テ</sup>れ！ マシ恐<sup>テ</sup>れ！ 死<sup>ヌ</sup>死<sup>ヌ</sup>死<sup>ヌ</sup>一<sup>ニ</sup>！

卷之三

おぼろうふひかわがつー。

空中でケロをまき散らしながら落ちていき  
ノノ！

盛大に地面を揺らした。

中心に人型の縦穴が空いたクレーターから、鉛色をしたたくましい腕が飛び出た。

あつぶねえ w マジ死ぬかと思つた w 落ちんのガチで怖かつた  
お w w でも傷一つ付いてねえマイボディやつべえ w w さすがへ  
ラだわ w

「ゲコツ！」「ゲコツ！」「ゲコゲコツ！」

地面から突然カエルがぼこぼこ湧いてきた。

えつ？デカくね？さすが異世界、3mのカエルとか初めて見たわｗ  
取り敢えずサンドバッグにしてやろうｗ　汚物は消毒だぜ！  
ヒヤツハー！↑なお本人は落下中にゲロ塗れになつた模様。

■■■■■■■■■■■■■■■■——！

吠えて一直線に飛び込む。そして右腕で斧剣を振りかぶつて頭に  
振り下ろした。

「グウベ！」

ヒヤツハーワ　ミンチにしてやつたぜ　うわ！　ピンクのグ  
ジユグジユしてんのキメえｗ

頭が爆散して地面に大きなシミを作り、脳漿やら血やらがべつとり  
と付いた斧剣を引き抜く。

さすがバーサーカーｗ　幸運B以外は全てA以上というステータスは伊達じやないぜｗ　つか俺ちゃんこんなG18<sup>グロ</sup>なのオツケー  
だつたけ？もしかして精神<sup>俺ちゃん</sup>が肉体<sup>ヘルクレス</sup>に引きづられて近づいてんの？  
まあどうでもいいかｗ　レツツ、パーリータイム！

「カズマ、カズマ！あっちの方にジャイアントトードがたくさん固  
まっていますよ！ここからだとギリギリ届きますし撃つていいです  
か！」

「まあ落ち着けって、取り敢えず千里眼で様子を見てだな…。」

「えーとどれどれ…。は？」

口を半開きで間抜けな顔を晒すカズマ。

「ブークスクスツ！カズマさん、何よその顔！まるで鳩が豆鉄砲食  
らつたみたいな顔してるわ！」

鉛色をした巨人が、打撃に強いはずのジャイアントトードを素手で  
一瞬で血煙に変えていた。

「るっせえよ！んな事より何かヤベー奴がいるんだが！え、あれ人  
間？モンスター？まあ刺激しないようにとつととこつから離れ…」

「エクスプロージョン！」

巨人が爆発に巻き込まれて見えなくなつた。

「あんの馬鹿ああああああつ！」

「フフフ…。どうでしたかカズマ？今回の私の爆裂魔法の出来は…？カエル共も一網打尽だつたでしょ…？」

うつ伏せになりながら問うめぐみん。

「最つ悪だよ！あそこに人（一応）らしきものがいたんだぞ！…どうすんだよ！」

「…………。ハハハ、とつても面白いジョークでしたね！……マジですか？」

ダラダラと滝のように冷や汗が流れるめぐみんに対して追い打ちをかけるように、「ああ！千里眼で見ていたところ、ギリギリ巻き込まれる位置にいたぞ！」

「…………。カズマ、あなたは何も見ていませんし私は何もしていません。もし何か見たとしてもそれは人型モンスターだつたんです。いいですね？」

「いやよくねえだろおおおおお！確かにモンスターっぽい感じもしてたけどおおお！」

「ならいいじゃないですかああ！どつちにしろどうせ被害者はもういないんですけどおおお！」

「おま…」

■■■■■■■■■■■■——!

咆哮が響き渡る。

「ヒツ！何ですかこの声は！」

「ツ!?まさか!？」

慌てて先程爆発に巻き込まれた鉛色をした巨人のいた場所を見ると、五体満足で立つて空に向かつて吠えていた。そして：目が合つた。

ヤバイ！これはヤバイ！

頭の中で警鐘が鳴る。生存本能が叫んでいる。アレには絶対に勝

てない、と。

「急いでここを離れつぞ！」

そう言つて乱暴にめぐみんを背負うカズマ。

「ギヤアアアアア！ ちよつと人が動けないのをいい事にどこまさぐつ  
てるんですか！？」

しないしつ！」

「ちっぱい!? 後で覚えておいてくださいよ!」

「おいアクラア！こつから離れつぞ！つてダクネスは!?」

「んー？ 外ヶ茶ノ谷の木下さん、「少々お花を摘んでくる」とで言って、そこの茂みに入つていったわよ？ お花を摘む趣味なんて意外とかわいいとこあるじゃない。」

「やべー！ おおおおお！ といつもいのちもふせにやかで！」

んじやなーのカズマさん?

「ああー！だからもうじきここにヤベー奴が来るん…」

アツシヤノノノ！

地面を深くえぐり 土砂をまき散らしながら目の前を鉛色の巨人が  
滑りながら通り過ぎていく。そして止まつた後こちらをぐるんと見  
た。

二二二



「セーーとナノ、しゃん！こんなのがいるなんて聞いて無いんで？」

氣絶してやがるうううう！」

あまりの恐怖に意識を思わずポイ捨てしためぐみん。

カズマは驚きで思わずめぐみんに回していた手を離してしまつた。

地面とキスをするめぐみん。

(マズいマズいマズいつ！相手はどう考へても格上！まともにやり合つても無理！無理ゲーすぎる！交渉つて…話通じんのかつ!?でも取り敢えずは…)

「スマセンでしたー！」

日本人が誇る最終究極奥義、D O ☆G E ☆Z A ☆である。

「うちのパーティーメンバーがあなた様に大つ変な粗相を働き、申し訳ありませんでした！そこの頭のおかしい爆発娘は煮るなり焼くなり好きにしていいので、どうか命だけは、命だけはお助けをー！おいアクア！お前もさつさと頭下げる！」

「ええ！私女神よ！女神が土下座なんてするわけ…」

「いいからとつと頭下げる！」

「痛たたたたつ！ちよつ、髪引っ張んないで！わかつたわよ！土下座するからあああ！」

躊躇なく仲間を売るカズマ。巨人は一切動こうとしない。もしや許してくれたのではと、そんな淡い希望が生まれた時、

「カズマ！大丈夫かつ！？今助けるからな！」

茂みの方からダクネスが剣を振り上げながらやつてきました。やつてしまつた。

「食らえつ！」

(仲間のピンチに颯爽と駆けつける私！私は今、人生で一番輝いている！)

「やめろおおおお！」

カズマの制止の声も聞かずに、普段は目標に全く当てれないダクネスの剣は奇跡的<sup>悪い意味で</sup>に当ててしまつた。そう、当ててしまつたのだが、カーンッ！

肩に当たつた剣は、金属が金属を叩いたような音と共ににはね返された。

「は？」

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

果然としているダクネスに、巨人は咆哮と共に中指を曲げてデコピした。

「はううんんんんんん！」

嬌声を上げながらゴロゴロと勢いよく転がっていくダクネス。そしてだらしない顔をしたまま動かなくなつた。

「…何やつてんだよおおおおおおお！」

「重ね重ね申し訳ありませんでした！あの馬鹿ダクネスには何してもいいので、命だけは！お助けをー！」

佐藤和真、16歳。魂の叫びである。

頭を必死に下げて土下座していると、不意に襟を掴まれて無理やり立たされた。赤と金の双眸と目が合う。そして巨人は右腕を振りかかる。脳裏に一撃で真っ赤な煙となつたジャイアントトードがフラツシユバツクされる。

（ああ。俺、ここで死ぬのか。）

「カズマさん!?」

不意に股間が温かくなる。

（ゴメンな。前世でも今世でも実際に使つてあげれなくて…。）  
相棒にそう語りかけた後、あのとき引き返していればこんな事にならなかつたのにと後悔した。そして、

■■■■■■■■■■――!

右腕が振るわれた。

死を覚悟して目をつむつても一向に何も起きない。

（え？俺、痛みもなく死んじやつたの？はあー、次はまともな世界に転生してえな。…でもあいつ等とは少しだけだつたけど楽しかったな…。）

そんな事を暗い世界で考えていると、

「カズマ！カズマ！」

と誰かが呼ぶ声が聞こえる。そして、

「いい加減目を開けなさいよ！」

「ぶふおつ！」

グーパン<sup>ゴットブロー</sup>を食らった。

「痛つてえ！つて俺、生きてる!?」

「何馬鹿な事言つてんのよ？」

そして視線を巨人に向けた先には、  
『近くの街まで案内してください。』  
と書かれたカンペがあつた。

「…………は？」

## 頭のおかしいパーティーバーサーカー

カエル潰してたらめつさお仲間さんが集まつて来たんだが w  
もう斧剣でグジユグジユすんの飽きてきたし殴つてみつか w  
斧剣を適当に放り捨て、近くのカエルへと飛び込む。

ハイ Y O U ! ハートキヤツチしちやうぞ w

カエルの胸へと思いつきり拳を握つて振り下ろす。

インパクトの衝撃は余す事なく、全てカエルの身体に吸い込まれて一瞬動きを止めたあと、文字通り爆発した。

うつわ汚え w ちよつ、カエルの体液口ん中に入つたんだが w  
ハートキヤツチ（物理）できなかつたわ w

てかこの身体、俺ちゃんつて殴り合いの喧嘩もした事ない優等生いい子ちゃんだつたのに、何か戦闘慣れつづーか殴ろうとか思つたら身体がスーつて動くんだよなあ。

ほんと、いくらヘラの身体つて言つたつて素人が殴る拳でカエルが水風船を爆発させたみたいにならねえだろ w

…ならねえよな？…でも剣圧だけで自動車吹つ飛んだり、道路が割れてたりしたよな？…カエルくらい血煙にしてもおかしくなくね ?

まあそれは置いといて、もうホント身体が自動で動くつづーか、ヘラの経験値が活かされてるつてみたいなんかねー？  
よし！考察終了！ とりま残り潰すか w

つて、え？ なあにこれえ？ 何か魔法陣ぽいのに周り囲まれてるんですけど？ しかもどんどん魔力？ つて感じの高まつて来てるんですけど！ 何か猛烈に嫌な予感すんだが w 私知つてる！ これつてスキルの心眼（偽）つてやつが反応してんだよね！ はよ出ようつと w 魔法陣の中心から飛び退いた瞬間、空間が爆発した。

土埃がもうもうとする中、地面上にふつ飛ばされて寝転がつていたが直ぐ様はね起きた。

痛つてえええー！ マジ痛え w w w 何かもう T N T どんだけ

使つたんだよつて爆発起きて、咄嗟に自動で庇うように左手動いたん  
だけど、黒焦げなつてんじやんやばｗｗ　中心だと絶つ対お亡くなり  
コースだつたわｗ

**[懇報]** 僕氏の左腕、備長炭になつたんだが（画像付き）

やへえ 脳内でスレ思ねす立ててしまつたW

てか痛すぎてかアドレナリン出すてか 痛みもう感じられないんだがマジでやばくね？ 腕もずっとこのままなの？備長炭でこの先生きていかなきやダメなの？

ほらヘテつてSNでセイバーに肩めこちやスバつて斬られたり 丰  
ルに王の財宝で愉悦されても治つたじやん？ いやまああれ死んで  
からのコンティニューーだつたんだけどさー？ こんくらゐの傷くら  
い治らねえの？ ほら治れ治れ w

…………マジで？ 治れ治れって念したら赤黒い魔力？みてやなのは包まれてその後に復活したお w やつたー w 備長炭から卒業だ w つかさつきからずつと視線感じんだよなあー。あつちらへんかな？ お？ 何か人影見えたぞい？ 情報入手だヒヤツハー w w

？  
お？何か人影見えたぞい？

よし！全速前進D A☆！

さすがヘラ w 2キロくらいの距離を30秒くらいで駆け抜けるとか w さすが大英靈 w

ちよつと勢いよく来ちゃつたからかそこの少年ビビつてますね  
さてO H A N A S H I しましようか、こつちは筆談だけどな  
やつぱ最初は挨拶が肝心だよなあ、つー訳で、

(特別意識：スラマツシアン W W W W W W W W W W )

→ インドネシア語でこんなにちわ

よし！ファーストコンタクトは完璧だなw さていよいよOHA

N A S H I をつて……何かボーイがD O ☆ G E ☆ Z A ☆を始めたん  
だが?

ふむふむ。この少年のパーティーメンバーが俺ちゃんに魔法を撃ち込んだと。なつほどー。魔法つてすげーなおい!?あの威力、宝具並だぞ!しかもまともに当たつてたら自分も死んでたと思うから恐らくAランク以上の攻撃力じやん。しかもこの倒れてる口りつ娘が撃つたつてえ…。

んな口りつ娘でもこんな魔法を撃てるんだし、そんなのがほんほん  
出てくる世界だとしたら、魔王つてどんだけ強いんだよ w ヤバくね  
w 難易度ルナティックじやん！俺ちゃん倒せれんのかなあー？  
何でも叶うつて願いで元の世界での死亡を無かつたことにするつ  
もり何だけどなあー…。

…よし、決めた。絶対に殺す。死んでも殺す。俺ちゃんのワガママの為にくたばつてくれよ、見ず知らずの魔王ちゃん？HF3章は絶つてえ劇場で見てえんだよ！

これは、失われた未来を取り戻すための物語。  
→ FGOみてえだな w  
(イケボ)

おつと考へ過ぎちやつたよ。放置しててすまないねえ、そこのボーアイ&嫌な感じのする水色ガール。

さていいよカンペを使うときが：つて何か女騎士にターゲット  
口ツクオンされてんだけど？俺ちやん何かしましたかねえ？（困惑）  
まあ取り敢えず一撃受けてみつかw この世界の剣士が自分に  
ヘラクレスを  
届きうるのか知りたいしw（慢心）

それにあの女神は十二の試練はねえよつて言つてたけど耐性はで  
きるらしいし、適當などこに食らつてちよこちよこ耐性付けていきま  
すか w

カーネツ!

は？マジで？まさか弾かれんのかー！えー、あんな魔法を使う口リイタのパーティーメンだから期待してたんになあー。

— — — !

(特別意識：つてギヤアアアアアアアア！)

こいつ頭の上にでつけえ芋虫乗つけてんんですけどW

芋虫マジ無理！小学校の時の給食に混じって、うつかりそのまま食つてトラウマになつてんだよ！その後、卒業するまで芋虫マンとか

言わせてたし！

か一消えろ！死ね！アアツケ！

スツテニヒンで飛んでいたな。あ、や三へ

ね  
…  
?

…え？あれ生きてるよな？しかも何か喜んでね？めっちゃ顔が放

…まあ置いといて。あれはいわゆる耐久特化のタンクみたいもんな  
んかねー?なら攻撃力がそこまで高くなくてもおかしくねつかw  
それより、…いい加減に土下座やめて頭上げてもらえませんか  
ねー?

よし少年よ、お兄さんはもう魔法ブツパの事も女騎士の事も気にしないから立ちなさい！

少年を捕んで立たせる。さてあのカンへを取り革えて出しよどか。右手を構えてからの、

— 1 —

(特別意訳 サモン W W W W W W )

おー! マジで出でたな! 書きますか?

うれこのハジメセカンドへ書いたが、ついで、

：何でずっと目瞑ったまま無視されてるんですかねえー？  
ほらそこの髪の毛青色系ガール？何とかしてくれ。

『近くの街まで案内してください』と書かれた紙を水色ガールに見せる。

「は……？ もういきなりビックリしたじゃない！ カズマさんがピューンってなると思つたわ！ もう驚かせないでよ！」

「つて、あなたつて近くの街つて言うとアクセルに行きたいの？」  
コクコクと頷く。

「ふつ。わかつたわ。この水の女神であるアクア様が導いてあげるわ！感謝しなさい！」

髪をかきあげながら

髪をかきあげながら勢いよく言うアクリア。  
「今女神って言わなかつたか？やつぱ何かそこの少年とか口  
リイタと存在が違う気がすんだよなー。」

：あーだからか。ヘラクレスって女神に人生狂わされてたから  
なー。そりや神様嫌いなどこもあって、それが自分に引き継がれてた  
から嫌な感じしてたつてそんなどこかねー？ま、何かこの女神って頭  
軽そうだし適当におだてますか w

さすがアクリ様！美神！頼りになる！

ふふりん！あなた中々見どころあるじゃない！私の信者にしても

構ねないわよ！」

「何でよ！？」

信者になる事を執拗に迫られたが何とか振り切った俺ちゃん。

向こうではずっと目を瞑つたままの少年に頭の弱そうな女神が  
グーパンをしている。：何かあの女神ちよつと心配になつてきたり  
少年にもカンペ見せるとしますか。

「いやー、本つ本当に迷惑をかけてすいませんでしたアルケイデスさん！うちの馬鹿共が大変迷惑をかけて！」

「やだ！アルケイデスさんが漢前すぎて惚れそう。」

少年たち一行と近くのアクセルという街に向かう俺ちゃん。少年、いやカズマと、ヘラクレスの名前は有名すぎるので転生キッズに目をつけられるかもしれないのにヘラクレスの幼名だつたアルケイデスと自己紹介をした後にカズマの連れを紹介してもらう時は少々問題があつたが、概ねノー・プロブレムな現状。少し振り返つてみつかw

・めぐみんの場合

「ほらやつやと起きるよめぐみん。」

そう言つて地面で氣絶しているロリイタをゲシゲシと足蹴にするカズマ。扱いがひでえ…。

「んー、はつ！私生きてる！それにカズマ無事だつたんですね！あの筋肉だるまの巨人にとつくにミンチにされてると思つてましたよ！」

「…お前、後ろ見てみろ。」

「何つて、ギヤアアアアア！何でまだいるんですか!?」

「お前アルケイデスさんに失礼だろ!?爆裂魔法食らわせといて！ほら謝れ！」

「え!?この見た目ですよ!?どう見たつてやべえモンスターじゃないですか！人間とかありえないですよ！」

「お前本つ当に失礼なやつだな！ああすみませんアルケイデスさん！こいつはちょっと、いやかなり頭がおかしいだけなんで許してやってください！」

「頭がおかしいって何ですかカズマ！ええ？私のどこが頭おかしいか言つてみてくださいよ！」

「全部だよ!?その妙にチンピラ臭い態度とか厨二臭え言動とか頭のおかしい行動とか！」

「つ!?よくも言つてくれましたねカズマ！いいでしよう！その喧嘩買つてやりますよ!?」

「ハツ！爆裂魔法撃つて身動き取れないくせに何を言つているのかなこの口りは！」

「ロリつ!?ふふふカズマ。あなたは言つてはいけない事を言つてしまいましたね！」

「取り敢えずさつさと頭下げる！」

「おう…。カズマが少女の頭を無理やりこちらに下げるとしている。

「ほら謝れよ。」

「…………ごめんなさい。」

「ああん？よく聞こえねえぞ？」

「うつさいですね！あなたは私のお母さんですか!?」

「お前みてえガキなんていらねえよ！」

また話が脱線して騒ぎ出した二人。

…ぐだぐだしてんなー（遠い目）

「おっほん！ いよいよこの私が名乗りを上げる時が来ましたね！」  
「さっさとしろよ。ダクネス起こさなきやいけないんだから。」  
「……我が名はめぐみん！ 紅魔族随一の魔法の使い手にして、爆裂  
魔法を操りし者！」

『アルケイデスだ。』

「おいめぐみん、無理してわざわざ立つなよ。膝ガツクガクだぞ？」  
「これには様式美と言うものがあつてですね…、あつカズマ！  
ちよつとその膝ツンツンすんのやめてもらえませんか!?」

「だが断る。」

「なああああああっ！」

あ、めぐみんが地面に倒れた。…にしてもカズマいい笑顔してたな  
あー。

「それじや次行きましょうか。」

お、おう…。

・ダクネスの場合

「おいダクネス、起きろよ。」

カズマが声をかけるも女騎士はピクリとも動かない。

「起きなきやひつでえ事すつぞ？」

女騎士は動かない…ってん？ 何か息荒くなつてね？

カズマは頭をガシガシと搔きむしりながら、

「今起きたらものすんごく酷い目に合うぞ？ もうお前が泣き叫んで  
も止めな…」

「そのものすんごく酷い事とは何だカズマ！ 詳しく聞かせろ！ そし  
て私に実行しろ！」

「やっぱお前起きてたじやねえかあああ！」

「それでそのものすんごく酷い事とは何なんだ！」

うわあ。めつさ興奮してんじゃん。もしかして…

「誰がお前にそんな事するかよ！ 嘘に決まつてんだろ馬鹿！」

「なつ!? 嘘だつたのか!…上げて落とすタイプか。くうん！」

あ、こいつドMだ（確信）。

「ほらお前勘違いして斬りかかつたんだから謝れよ。」

「仲間の危機だと勘違いしたとはいえすまなかつた。許されるとは思つていながどうか謝罪を受け取つてほしい。」

そう言つて頭を下げる女騎士。

『何、あれはそう取られてもおかしくない状況だつた。』  
ペラつ。

『だから気に病むな。謝罪を受け取ろう。』  
「すまないな。助かる。』

（めぐみんと違つてえらくすんなり謝つたな…？てかやつぱりアルケイデスさんいい人すぎる！人つて見かけによらないんだなあ…。）  
「ところで貴公を見込んで頼みたい事があるのだが…？」

『何だ？』

（猛烈に嫌な予感…！）

「私をそのたくましい腕で殴つてくれ！」

「はいダウトオオオオ！」

「何だカズマ？今は邪魔してほしくないのだが？」

「何だカズマじやねえよ！今までの流れが台無しだよ！ぶち壊しだよ！」

「しかし…あの頭から突き抜けて行くような痛…、快感が忘れられないんだ！デコピンであれだけなら殴られたら私は一体…くうつ！」

「なぜ言い直した！今なんで言い直したんだよ！」  
「頼む！後生だから私を殴つてくれえええ！」  
ええ…。ガチもんのやべえやつじやねえか…。

「先程は少し取り乱してすまなかつたな。私はダクネスと言う。」  
(少し…?)

『アルケイデスだ』

「そうか。よろしく頼む。…やはり軽くデコピンだけでも…？」

「却下だこの変態クルセイダーが！」

「はあん！」

回想終了。うん、なんつーか全員キャラ濃すぎだろ w

「アルケイデスさんってアクセルに何しに行くんですか？あつ、答  
えられたらでいいんですけど？」

うーん何と答えたものか w? カズマたちは冒険者をやつている  
と言つていたな…。よしそれで行こう！

『冒険者登録をするため。』

「え!? アルケイデスさん冒険者登録してなかつたんですか!?

「本当か!?あの強さで冒険者登録をしていなかつたとはな…。てつ  
きり私もどこぞの高ランク冒険者かと思つていたが、確かにそのよう  
な人物など聞いた事なかつたな…。」

「それでどうしてそのカンペなんて使つてるんですか？」

と、一行たちが気になりながらも聞かなかつた事をめぐみんが聞  
き、  
き、「それぞれ！私も疑問に思つてたの！」

アクアがそれに便乗した。

やつべ w なんて答えよう w 確かに普通に話せばいいもんな w  
慌てているところをカズマが、

「お前らそんな地雷わざわざ踏みに行くなつて！ほら本人も訳アリ  
感出してんじやん！気にしないでくださいアルケイデスさん！」

フオローしてくれた。いやー助かつたわ w マジで。

「ところであなたから神性みたいな感じるんですけどお父様かお  
母様どつちか神なの？」

「だから聞くくなつて言つてんだろうおがおあああ！」

そんな事を駄弁りながら進んで、

「あ、見えてきましたよ。」

アクセルの街に到着した。



## 冒険者登録

「だあかあら！俺はこのアクセルを裏で牛耳つてるスゲえ奴なんだぞ！それをあの衛兵どもは…」

ドンツと乱暴にクリムゾンビア・クリムゾンネロイド、いわゆるシユワシユワが入っているジョッキをテーブルに叩きつける。

「おいダスト。いい加減昼間つからそんなに飲むのやめろつて。「るつせえ！飲まなきややつてらんねえよ！」

グビグビと飲むダスト。やがて空になり、

「おーい！もう一杯追加だ！」

その様子をパーティーメンバーは呆れて見ていた。

「おいおい、ダストまたずいぶんと荒れてんな？あいつ今回は何やらかしたんだ？」

「ああ、本屋で立ち読みしてた女のスカートの中を這いつくばつて見ていたら、気付かれてそのままハイヒールで頭踏まれてから衛兵に突き出されたらしいぞ。」

「あいつも懲りねえよな…。」

「つたく、俺ほど謙虚に慎ましく生きてるヤツは中々いねえのによお！酒と肉と女と金！それさえあれば何もいらねえ！」

ダストには是非とも一度、辞書で謙虚と慎ましいの意味を繰つてほしい。周囲がそう思つていると、突然何かに気が付いたように一人の冒険者が入り口を凝視する。すると他の人もつられて首を動かし、そのまま動かなくなつた。

「つたつく何だ？お前ら俺の話聞いてんのかあ！さつきから黙りやがつてよお！一体何見て…つ!?」

（何だよアレッ⁈）

周囲の喧騒もいつの間にか止んでいたので首を入り口付近に向けると、そこには鉛色の巨人がいた。

そのまさに鎧のようになにかつこに発達した筋肉は見る者を圧倒させ、右手にはその体躯に釣り合った、常人では振るうことさえ叶わないだろう大きな斧剣を持ち、全身から容易にわかるほど強者の風格が立ち上つていた。そしてベットリと斧剣と身体の至るところに血が付いていた

た

巨人が一步進む。それだけの動作なのにまるでぽつかりと大きく口を開けた、絶対的な捕食者が近づいてきたように感じられた。

周囲の音が一切存在しなくなつたかのように感じられる中を、巨人は床に大きな悲鳴をあげさせながら受付けへと進んで行く。

そして受付けカウンターの前で止まつた。

「ぼ、冒険者ギルドによ、ようこそ……きよ、今日はどうされまひたか……？」

職業意識からか、声を何とか捻り出す受付け嬢ルナ。

その巨人はしばらく動かずに停止していたが、そして……

（――）

「あつ、あれが冒険者ギルドです！」

うつひよ w とうとうやつて来ましたよ冒険者ギルド！ 中世っぽい建物とか、エルフ耳とか、もういかにもRPGに出てきそうな服着た人とか歩いてつし、もう街の中だけで興奮やべえ w

「冒険者登録は受付けでするんですけど……」

『わかつた。』

よし少年たちよ！ 行つてくるで w

「カズマさん、カズマさん。登録するとき手数料かかるんだけどアルちゃんお金持つてそうに見える？」

「いや俺今から説明しようと思つ……つてアルちゃんつて何だよ!? めつちや気安いなお前!？」

「えー、だつて何かシンパシー感じるしー? こう、神的オーラつていふか? んー、人と神のハーフ的な?」

「何ですかそのかつこいい設定!?あの筋肉だるまには勿体無いです

！」

「黙れめぐみん。てか筋肉だるまなんて絶対にアルケイデスさんに言うなよ？まあ目が合うだけで気絶するようなビビリならそんな度胸ねえか。」

「ブークスクス！どう考へても漏らしてた男の言うセリフじやないわね！」

「なつ！」

「えつ、カズマ漏らしてたんですか？！どうりで変な匂いするなって思つてたんですね！バツチい！下ろしてくださいっ！」

「も、漏らしてないし！てか背中で暴れるな！」

「漏らす程のプレッシャーとは…くうつ、私も味わつてみたい！そしてゴミのような目つきで見られたい！」

おーおー。何か入つてたらめつさ見られてるんですが　えつ何でこんなに俺ちゃん注目されてんの？（困惑）

ハツ！…なるほど、そうか…。

俺ちゃん上半身裸だからかww

そつかw いきなり上半身裸で筋肉ムツキムキの男が来たらそりやビビるよなw ↑違うそうじやない

やつべw やばいヤツつて思われてつかもw ↑別の意味で思わ  
れている

取り敢えず受付けのお姉さんのとこに行きますかw

受付けカウンターまで來たんだが、このお姉さん大つきいw（どこがとは言わない）

やつべ、めっちゃはみ出そじゃんw 俺ちゃんの大つきなお手手で隠してあげましょかw（ゲス顔）

「ぼ、冒険者ギルドによ、ようこそ…！きよ、今日はどうされまひたか…？」

おつと、胸を見ていたことがバレちゃいましたかw 声が上づつてらつしやるw てかあなた噛みまみたよね？ ごほん！まあ取り敢

えず冒険者登録しますか。自分は立派な紳士だからネ！

よし、かきかきつと。このベンツてマジでどうなつてんだろうな？

『冒険者になりたい』

「そ、そうですか…。えーっと、では最初に登録手数料がかかります  
が…？」

……は？金取んの？

ブギヤwww 僕ちゃん無一文なんんですけど w

詰んでるw え、どしょ？カズマたちに借りるのもいいけど、話聞いてたら毎日が苦しそうだしなー。馬小屋で寝るつて w

おつ、あそこに酒持つてる冒険者（仮）いんなー。こんな昼間から酒飲むとかいい身分だなおい。羨ましい！まあそんな訳でお金に余裕あるつしょ。頼みに行きますか w

「おいあの大つきいやつこつちに来るぞ！」

「もう威圧感やばすぎでしょ!?」

「おいキース！リーン！ティラー！待てよ!？」

ダスト以外は立つていたためそそくさと逃げることが出来たが、座つていたダストは一人取り残される。

「つ!?何だよ！」

鉛色の巨人はダストのすぐ側に立つ。近くで見ると、その巨体はより大きく感じた。

その巨人はどこからともなくカンペを取り出し、

『冒険者登録用の金』

ペラつ。

『貸してくれないだろうか？』

とめくつた。

「は、はあ？何でこの俺がてめえに金貸さなきやなんねえんだよ？」  
ビビつていたが、持ち前の反骨精神で何とか取り直す。

その瞬間、巨人から放たれるプレッシャーが一気に重くなつた。  
身体がガタガタ震える。どう足搔こうが勝てない。無様に為す術もなく殺される。そんな思いが湧き上がる。

そして生存本能が囁く。今すぐ逃げろ。泣いて許しを乞えと。

巨人が顔を近づける。赤と金の瞳と目が合う。それだけで心臓がもう爆発してしまうんじやないかと思うほど早鐘を打つ。

一体どれくらいの時間が経つただろうか。まだほんの数秒かもしれないし、一時間経つたのかもしない。極度の緊張感に晒されて、時間の感覚がわからない。もう限界だった。

「つこれやるよ！」

そう言つて金が入つた袋を投げ出す。

『こんなにもらつていいのか？』

「いいよ！』

早く自分の前からいなくなつてほしい。その一心で叫ぶ。

『感謝する』

そして目の前から巨人は消える。  
（助かつた……）

助かつたという安堵により、一気に緊張感が緩んだダストは、  
「ブリュッ！」

白目を？ いて失禁をしながら脱糞をして床に倒れた。

ヘイ！ そこのお兄さん！ この恵まれない俺ちゃんにマネー貸してくださいない？

「つ！ 何だよ！」

おつと書かなきやわかんないよねー。よしこれでよしつと。

『冒険者登録用の金』

ペラつ

『貸してくれないだろうか？』

「は、はあ？ 何でこの俺がてめえに金貸さなきやなんねえんだよ？」  
カツチーン。今のはちょっとさすがの俺ちゃんも傷付いちやいましたわー。もつと言ひ方つてあるでしょ？ まあ確かに金貸す理由とかないけどさー？

もう思わず眉間に皺が寄っちゃたよー。ここはもう少し粘つてお

願いしてみますかね？ほらこっちも人にお願いするときは目合わせなきや、誠意足りてないしね。

ジッパーと見てみる。ねえーお願ーい。お金貸してよおー。

何か急に汗かき始めたなー。どうしたんだろ？どつか具合悪いんかな？このどこかチンピラじみたお兄さん。

「つこれやるよ！」

おつ、何か袋投げてきた。キャツチしたらチャリンって小気味いい音したしお金めっちゃ詰まつてんじやんｗ 結構入つてんだけどしこんなにもらつていいのかな？一応聞こうつと。

『こんなにもらつていいのか？』

「いいよ！」

いやー助かつたなー。このお兄さんには本当に感謝しないとなー。ありがたやーありがたやー。

『感謝する』

さーてやつと冒険者登録だｗ

「ブリュつ！」

何か音したから後ろ振り返つたら、お兄さんが白目剥きながら股間を濡らして、ケツの方から嫌な音を立てて床に倒れていた。

……よつほどトイレに行きたかったんだろうなー（震え声）

「うわっ！ダストのやつ、失禁しながらクソ漏らしてやがる！」

「きつたね！てか臭つ！おい誰かクリーンかけてやれよ！」

「嫌よ！近付きたくないし！」

その後、ダストは意識を取り戻すまでそのまま放置された。

「よかつたわねカズマ！漏れ友が増えたわよ！」

「よかつたですねカズマ。あつ、匂い移るんで半径3メートル以内に近づかないでください。」

「くつそおおおおおお！」

『これで足りるか？』

「はい…。」

お姉さんが目を合わせようとしないのは俺ちゃんの気のせいなの

かな？かな？

「それでは改めて説明を。各冒険者には職業というものがござります。そしてこれが登録カード。冒険者がどれだけ討伐したかも記録されます。」

やつと調子が出てきたのか声に震えが無くなつて来たお姉さん。にしてもそのカード便利じゃね？ マジでどういう仕組み？

「レベルが上がるとスキルを覚えるためのポイントが与えられるので、頑張つてレベル上げしてくださいね！」

溢れ出るRPG感ww ジョブ選んだらそのその職業のスキルツリーが開放されてくつて感じねw おけまるw

「それではこちらの水晶に手をかざしてください。」

へー、ステータスとか出てくるんですね分かります。

にしても注目されてんなw 背中にビンビン視線を感じるぞいw おー、手かざしたら水晶から光が出てカードに何か刻まれてくw すっげえw

「これでステータスが分かりますのでその数値になりたい職業を決めてくださいね。」

「はいありがとうございました。えっと…アルケイデスさんですね。はああああ！ 知力だけ他より劣つていますがその他の全パラメータが高ランク冒険者と同等、いやそれ以上ですよ！ 特に筋力の数值が桁違います！ こんなステータス見たことありませんよ！ 規格外ですよ！？」

はへー、やっぱバーサーカーはスゲえー。（小並感）

「魔法使い職は無理ですがそれ以外だと何でもなれますよ！」

「クルセイダー ソードマスター、アーフプリーストなど上級職も全て開放されますし！」

周囲からざわめきが響く。んーキモチいですわw

でもお姉さん？ これって盛大な個人情報の暴露ですよね？（真顔）

「うー、いくらアルちゃんたつて女神である私の初期ステータスを超えているなんて許せれないわ！」

「そうですよ！ というか魔法使い系職になれないなんてやつぱり脳

筋じやないですか!?

「お前らマジで黙つてろおおおおお!」

「それで何の職業を選びますか!」

お姉さん興奮してんなー。あれだわ。興奮してる人見てたら逆に冷めるつてやつだわ。てか職業なんてとつくにもう決めてっし。

『狂戦士で』

お!お姉さんの顔が引き攣つたぞい?

「狂戦士ですか…? 狂戦士は確かに攻撃力はソードマスターに並び、それ以上の火力もス狂化キルの使用によつては出せますが…。攻撃には打たれ弱くてその…攻撃が過激というか味方も巻き込むというか…。ソードマスターはどうでしようか!? 狂戦士と同じく攻撃特化ですよ!」

『狂戦士で』

「えつ!なら…」

狂戦士とは確かに攻撃力はトップクラスの攻撃力を誇つているが、狂化スキルを使うと味方を巻き込んで一切無視し、また防御系スキルも存在せず、突撃するだけが脳で協調性皆無であるため、パーティーに余り誘われない不遇職である。そのためルナは説得を試みていたが、無言で『狂戦士で』と書かれたカンペを持ち続けているので諦めた。

よし!ひたすら『狂戦士で』つてカンペで意思表明して、何とか違う職を勧め続けるお姉さん振り切つて狂戦士を確保したでw

「ええ…狂戦士か…。」

「あんなのの攻撃に巻き込まれたら死ぬぞ…?」

「狂戦士はちょっとね…。」

「ゞほん! それでは冒険者ギルドにようことアルケイデス様、スタッフ一同心より今後の活躍に期待しております!」

まあもうすつこと終わつたし、街の中適当に歩いてみつかw 幸い金はあるしw おつば…おつと、お姉さんありがとねw 明日からクエスト受けに行くよw

嵐のようにやつて来た鉛色をした巨人は堂々と入り口から出ていった。そして後に頭のおかしい狂戦士<sup>バーサーカー</sup>と呼ばれる男の冒険が始まる…かもしれない。

（）（）

その夜：

まさか自分が寝れるベッドなくて馬小屋に泊まるとか草<sup>w</sup> はよ寝よつと<sup>w</sup>

「はあー、今日は疲れたなー。」

「ねえカズマ！ アルちゃん私達のパーティーに誘わない？ 絶対に活躍してくれるわよ！」

「え…。まあアルケイデスさん確かに強いし、1回だけ仮になら…。（ん…？ 何かいつもの俺らの寝てるところの横に黒くて大きいもんが…つてアルケイデスさんじやん!? めっちゃ爆睡してるし…）

「あらアルちゃんじやない！ ちようどいいわ！ ねえアルちゃん、この水の女神たるアクアがいる私達のパーティーに入らないかしら！」

「おまつ！ アルケイデスさん寝てるんだから起こすなつて…！」

「んもー。アルちゃんなかなか起きないわね。ほら頬つんつーん。（ああああああああああああ！）

アクアが屈んで頬をツンツンしようとした瞬間バーサーカーは寝返りをし、アクアの顔面目がけて裏拳が飛んで、食らったアクアは吹っ飛んでいった。

「アクアあああああ！」

「おいこらさつきからうつせえぞ！」

「すんません！」

■ ■ ■ ■ ■ ————— ZZZ

→騒ぎに對して一切起きる氣配がなく爆睡